

一九六四年（五四歳）

五月二日

今朝病院にでてびっくりした。昨日の観桜会で病院の人たちがなぐりあいのけんかとなり、血を流した人まで出たとのことであった。

宮本君は例の調子で関係者から事情を聴取していた。私はそれを阻止しなければならなかった。それでは、みんなが自分を守り、他人を悪くいい、みんなのなかが割かれるのではないかと。

五月十八日

国鉄の〇〇君をアル中で収容

五月三十一日

午後五時半の下り列車に大清水入院中の〇〇君がはねられて死ぬ。

八月十三日

この話をしてくれた福左内の佐藤さんが来訪したのは、大清水入院患者の〇〇君の伯父であり、〇〇君は近く退院させたいので、その意図を伝えながら、盆休みに〇〇君を昨日外泊に出したのに、泡をくってやって来たのであった。

「福祉の人が知らせてくれたのですが、保健所へ行って浅虫病院に入れて貰ったらとの話であります…」

佐藤さんたちは早くも、〇〇君を、他の施設に送りこむことを考えているらしい。

「外泊に出て、〇〇君どうしています」

「寝てばかりいるようです」

早くも〇〇君の行動を非難してくる。

「久しぶりのわが家なので、わが家の畳をたのしんでいるのではないですか」

「そうではないらしいですよ、奥さんの話では、来なければよかったと言っていました。それで福祉の人に頼んでみたのではないですか。」

困ったことをしゃべるものだと私は顔をしかめて椅子に背をもたせ、佐藤又四郎さんの顔をにらまえた。二人の間には沈黙がつづく。

この佐藤さんは、昨日〇〇君を退院させようとしたとき、それを快く思わず、それに抵抗し、困った人だと私のどこかに刻みこまれていった人であった。

「実は、〇〇君ばかりでなく入院患者全部の家族たちに集まって貰い、退院を順調にすすめる準備と相談をはじめようと思っていたところです。散々困った行状をしたあとでの入院であり、四年五年と入院している間に、うちのなかが平和になっていたところへ、昔の無法者がいまでは無法ではなくっているのだが、家族の人たちはそれを体験として知っていない、そこへ患者が帰って行くので、患者を警戒し、患者を不安にし、患者と

トラブルを構えてしまう。いま〇〇君の奥さんが、福祉や保健所と相談し次の収容を考えているようでは、〇〇君を快く迎えてくれる気持ちにはなっていない、それではことは面倒である。奥さんとよく話してくれませんか」

私はそう願うほかに道がなかった。

〇〇君はいま四十を三つをこしたか、彼が四年五年入院し、その四年五年を実質上の後家生活をしている妻君に、第二の男でもできているのではなかろうか、そんなことを昨年も考えたことがあったので、私は入院中の別の患者の実例を話したあと

「〇〇君の奥さんに、第二の、いい男ができているということはないんでしょう？」と念をおしてみた。

佐藤さんは言下にそれを否定してくれた。

九月十三日

大清水分院の運動会

狂人の年一回の運動会に雨雲おそってくる。われ空をにらまえ、こぶしを握る。めしいたる心と手でどじょうをつかみおわれれば、思わず唇のほころびてくる。ゴールをすぎてなお疾走する人あり。その人に万雷の拍手とどろく精神病院の運動会。狂人の腕まくりあげあり、たのしい運動会。雨ふらんとしてくる、雲は消えて失せろ。

十二月十七日

県会をぬけ出してきて入院患者を回診してまわる。そのあと看護婦さんの忘年会にひっぱり出され、みんなに散々なおもちゃにされてしまう。

一九六五年（五五歳）

一月三十一日

こうしてとにかく一月はすぎて行く。それにしてもこの一月は県会議員としての仕事がないにひとつ出来なかった。東大から赴任してくる医師がおくれているので毎日診療からぬけるわけには行かなかった。

二月二日

夜十二時までかかって二通の恩給診断書を書く。昨日も一通、一昨日は二通、日曜を使い夜をつぶして書く。恩給診断書は大学病院も国立病院もめんどくさがって書いてくれない。結局俺が書くことになる。一二時の夜の足音をきいてから何故俺ばかり書かなければならないんだと、馬鹿くさくなる。馬鹿くさいが書いてやらなければならない書類である。だって、彼らは戦傷者であり、俺が書くことによって一〇万円から手に入るのだ。

三月二十日

病院にボヤ出る。

四月二十二日

厚生省精神衛生課に本院の精神病棟使用転換の件で陳情。

五月十四日

急患だ、往診だ。

十五キロはなれた農村へ、病院で並んで待っている患者を気にしながら往診に出てゆく。林の森は若みどり、村があったのだ、車のなかから眺める。サイド硝子をあけてみる。風のなかには緑の香ある。

往診のおかげ、俺は車のなかで、かえで、柳、けやきなどのもえ出る呼吸を一杯吸ってみた。春を忘れていた俺に、夏の到来に気をくぼるゆとりのない俺に、急患への往診はいたいほどに春と夏を示してくれた。

八月十七日

アルナシ会の第七回月例会

稲の穂を出させ、出た穂に花を咲かせる。暑熱について集まってくる。くるわ、くる、くる、六夫婦をまじえて二四人。

あってもなくともいい、そんな意味でのアルナシ会ではない。アルコールなしの、アルナシでもない。酒をのんで身体をこわしてはならない。酒をのんで妻子をこまらしてはならない。酒をのんで一家を貧乏にたたきこんではならない。酒からの害をなくしよう、そんな意味のアルナシ会である。

酒におぼれるのは人格がおとり、意志が弱いからだ人間をしかりつけるために集まったのではない。深酒にし、乱酒にし、大酒にしている日本の社会の悪の根をほりさげようとしているのである。深酒になり、乱酒大酒になっている人は、そうなるようにしている日本の社会の犠牲者であるのだ。男をかりたて、酒に走らせ、家庭と社会をみださせている社会のあり方から乱酒家を保護してやるのだ。

そんな認識とそんな態度になったのは一九六一年一月のこと。それからきょうまで四年の闘いが流れ去った。そうだ、それは闘いであった。日本では酒のみは悪者と考えているのに、わたくしたちは酒のみは犠牲者だとしているからである

わたくしたちにも、そんな時代があった。そんなときのわたくしたちは酒のみを助けるかわりに、叱ったり説教したものであった。

一九六一年八月、わたくしたちはソ連に遊んだ。ソ連共産党首脳部が、いまの修正主義におちこむ前のころであった。

ソ連から帰ったわたくしは乱酒大酒の原因を資本主義の社会生活のなかに求めるようになった。

それまで一年一〇〇件足らずの酒についての治療や相談が、それからの一年で六〇〇件になった。その次の年には八〇〇件になり、昨年は一〇〇〇件、ことしの六月までは、すでに六〇〇件をこしている。

アカハタの日曜版が、読売新聞の東北版が、「暮らしと健康」がとりあげるようになってから、闘いは全国にひろまっていった。問い合わせや相談などの手紙が一年に六〇〇通も来るようになった。わたくしたちは、わたくしひとりの手におえなくなり、磨、大橋、マサミと医療活動部をつくって外来相談や手紙に応じた。

わたくしたちは問題を世間に提起した。「酒の害から家庭を守る会」が息子と夫の大酒乱酒で困っている母と妻の手でつくられた。酒のために入院したことのある家族たちでアルナシ会がつくられ、きょうの集会になっている。

八月十九日

東京の後藤先生が、アルコール対策を見学勉強に来る。

八月三十一日

RABの木村とともに赤倉山にのぼり、修業者たちの実態見学と山伏修業者とのインタビューを実施する。

山が晴れ、空気は薄く、お山の中腹にたどりつけば、お山はははであり、その母の懷に抱かれた感である。来てよかった。生きていてよかったと思う。

赤倉山の

大権現に

うらないして貰う人

二〇余人

涙ながしてあり

この国がかなしい

九月一日

赤倉山であった須藤というゴミソ。青森放送の木村記者の要請で赤倉山に宮本明義の車で須藤賢次にもご苦労して貰ってたどりつく。私は私という人間と私たちの目的をかくさないで報告してから、インタビューに入る。

彼女が三〇〇巻～五〇〇巻のお経を三時間もかけて読む間に達する神がかりの境地は、森田正馬先生の「祈禱性精神状態」なのではなからうか。

それにしても、神様おりて貰いに来ている人たちの殆どが私の顔を知っている（彼らの誰かが私の医療をうけているにちがいないからである）。この事実は重大である。医学で解決されないものを彼らは神に求めているのではなかろうか。医師と神の両またをかけているのかも知れない。

十月十九日

大清水分院の増築落成記念式典

十月二十一日

大清水分院ボヤさわぎ

十月二十二日

議会の最中弘前からの電話でびっくりする。だって出張の前夜わが病院でボヤあったればなり。電話のなかで事務長の声は喜びにみちてあり。ボヤについてジャーナリズムは四段ぬきでほめてあると。

火災予防の訓練をくりかえしていたこと、消火設備をほどこしてあったこと、患者と議員の心のつながりができていたとのことであった。